令和6年度 江戸川区立瑞江小学校 学校関係者評価報告書（学校経営計画・学校関係者評価シート）

学校教育目標	江戸川区の教育目標を受け、未来を担う子どもたちの豊かな人間性と道徳心を培い、自ら学び実践する個性や想像力を伸ばす教育の充実を目指す。また、地域とともに歩む区立小学校として「瑞江地区の人々とのかかわりの中で地域の宝として生き生きと学ぶ瑞江小の子」の育成に努める。		目指す学校像 目指す生徒像 目指す教師像	人権尊重の精神を基に、国際社会に貢献できる日本人の育成を目指す。 ◎よく考える瑞江の子 ○元気で明るい瑞江の子 ○進んで物事をする瑞江の子 ○思いやりのある瑞江の子
前年度までの本校の現状	成果	一人一台端末について、児童が操作に慣れ、教員が活用法を研究することによって学習活動での使用頻度が高まり学力向上に寄与することができた。若手教員を中心に教員が児童とともに積極的に運動に取り組み体力の向上が図られた。	課題	読書習慣の確立に向けて、朝読書や読書月間の取組、学校応援団図書ボランティアによる本の読み聞かせなどを実施しているが引き続きの取組やさらなる工夫が必要である。

重点	取組項目	具体的な取組内容	数値目標	達成度		「中間」自己（学校）評価（A～D）		「中間」学校関係者評価（A～D）		「年度末」自己（学校）評価（A～D）		「年度末」学校関係者評価（A～D）		次年度に向けた改善案
				9月	2月	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	
学力の向上	○「個別最適な学び」と「共働的な学び」の発展	学習活動におけるICTの利活用の推進	毎日、タブレット端末を活用した授業を実施	B		B	ほとんどの教員が毎日タブレット端末をいずれかの授業において活用している。	A		A	ICT支援員と連携し、どの教員もICTを活用した授業の力量を高めた。特に個別最適な学びにおいて、多くのICT活用を図ることができた。	A	ICTの活用はこれからの社会で必須と思われる。学校でもその環境をより整えてほしい。	毎年のように新たなアプリやシステムの導入がある。適宜対応し活用を進める。
	OGIGAスクール構想の取組み	各教科指導の中でプログラミング学習を取り入れる	年2回、高学年を対象とした外部講師によるプログラミング授業を実施	B		B	9月に6年生を対象にプロジェクトマップのプログラミング授業を実施した。	A		A	9月のプロジェクトマップの授業に続き12月にはドローン操縦のプログラミング学習の外部講師を招聘、出前授業を実施した。	A		引き続き出前授業などを積極的に招聘しプログラミング教育の充実を図る。
	○読書科の更なる充実	公共図書館巡回職員と連携した探究学習の実施	全学年で調べる学習コンクールに作品を応募	B		B	夏休み明けに、全学年から調べる学習コンクールに作品を応募した。	A		B	資料集めや読み聞かせ等で巡回職員と連携を進め、読書科及び探求学習の充実を図った。「江戸川っ子読書科コンクール」に作品を出した。	A	読書の機会を積極的に設定して、本に親しむ児童の育成を期待する。	巡回職員との連携を継続し、探求学習のさらなる充実を目指す。
体力の向上	○運動習慣の定着	学期に1回のなわ跳び週間の設定	80%以上の児童が江戸川区なわ跳びコンテストに参加	B		B	1学期に計画通りになわ跳びに取り組み、全児童が江戸川区なわ跳びコンテストに参加した。	A	積極的にコンテストに参加して体力を向上してほしい。	A	10月と1月にもなわ跳び週間を設定し全校でなわ跳びの取組を実施した。2月には外部講師を招聘して、なわ跳びの出前授業を実施した。	A	さまざまな運動の機会を通して体力の向上を図ってほしい。	体育の学習とも連携させ、より積極的になわ跳びに親しむ環境を整備する。
		全校児童による様々な運動遊びの実施	年間20回程度、中休みに全校運動遊びを実施	C		C	計画的に全校運動遊びを実施しているが、熱中症防止のため猛暑日の数回は活動を中止した。	A		B	夏以降は猛暑もなく、計画通りに全校運動遊びを実施した。鬼ごっこやボール遊び、長縄などに取り組み児童が体を動かす機会を設けた。	A		猛暑を踏まえた年間予定や、屋内で取り組むことができる活動を検討する。
実現に向けた教育の推進 共生社会の推進	特別支援教育の充実	通常学級と特別支援学級との積極的な交流	日常的な共同学習および特別支援の理解推進教育を実施	B		B	3年生を対象に理解推進教育を実施して、特別支援や障害への理解を促進した。	A	共同学習の機会が多いところはとてもよいと感じている。特支学級への偏見がなくその子の個性を受け入れられている。	A	理解推進教育の実施と併せて、通常学級と仲よし学級合同の学級活動「仲よしタイム」を実施して児童同士の交流を深めた。	A		特別支援学級を有する環境を今後も活用し、交流や障害理解の教育を推進する。
	ユニバーサルデザインの推進	巡回指導や特別支援教室専門員の活用、日本語指導員や日本語教室との連携	毎月、ケース会議を実施し指導・支援の方針を確認	B		B	特別支援コーディネーターや専門員を中心に支援を要する児童のニーズをこまめに把握し対応している。	A		A	個々のニーズに応じ今年度新たに7名の児童を巡回指導につなげた。海外からの転校生には日本語指導員を充て日本語教室にもつなげた。	A		様々なスタッフや外部機関と連携を続け個々のニーズに対応した教育を行う。
不登校・いじめ対策	生活指導の充実	SC、特別支援コーディネーター、SSWと連携した適応支援	毎月1回、不登校対策委員会を実施し情報共有	B		B	毎月の情報共有を進めている。SSWとも連携し対応している。	A		B	SSWやSC、校内別室指導支援員らと連携し、登校支援や相談などを粘り強く続けることができた。不登校は減少傾向にある。	A	どの子ども学校に楽しく通えるよう、支援や配慮を続けてほしい。	児童が不登校になる前の普通の丁寧な観察や支援も拡充していく。
	Ohyper-QUの活用	QUテストの児童の実態把握に基づいた指導の推進	年に1回校内でQU研修会を実施	B		B	1学期にQUを実施して、結果を担当が分析した。今後校内で共有を図る。	A		A	各学年の結果を分析し、全教職員で共有して生活指導や学級経営に役立てた。保護者にも結果および今後の指導の方向性を示した。	A		L-Gateの活用で児童の様子をこまめに把握し、生活指導や支援に生かしていく。